

## 主イエスに背負われて・・・

ルカによる福音書5章1節～11節

2021/10/10

私たちは、今、ゲネサレ湖の湖畔にいます。東の空には、すでに太陽が高く昇っています。群集がイエスの話を聞こうとして、岸辺に押し寄せています。その岸辺にたたずんでいるイエスは、近くに2艘の小舟が岸に引き上げられているのをご覧になりました。その近くでは、数人の漁師が網を洗っています。あまりの群衆の多さに、イエスは、そのうちの1つのシモンの舟に乗り、岸から少し離れたところへ漕ぎ出させて、舟から群集に語り始めました。

群集に向かって語りながらも、イエスの目は、小舟の中のご自分の傍らにいるシモンに注がれています。イエスは群集に語り終わると、シモンに舟をさらに深みに漕ぎ出させました。そして「網を降ろして、漁をなさい。」と言われるのです。

シモンとイエスとの出会いは、これが初めてではありません。数週間前に、シモンの弟であるアンデレが、「私たちは、メシア-キリストに出会った！」と言って、兄シモンをイエスのところへ連れて行き、そこでイエスに会ったのが最初でした。その時、イエスはシモンを見つめ、「あなたを、ケファ（言い換えれば、『岩』という意味の）ペトロと呼ぶ。」（ヨハネ 1:42）と言われました。今は、小さな石ころのようにしか見えないけれども、将来「岩」となって教会の土台になるという意味で、シモンを「岩」-ペトロと呼びました。イエスがこの二人に「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう。」と言われた時、二人はすぐに網を捨てて、イエスに従って行きました。それが数週間前のことでした。

しかし、今、シモンは再び漁の仕事に戻って来ています。その姿は、初めに彼が勇んでイエスに従って行った姿とは違っています。実際は、漁の仕事に戻って来たと言うより、「逃げて帰って来た」と言ったほうが正しいかも知れません。

この数週間の中に、シモンに一体何が起きたのか、知ることはできません。

自信過剰のシモンが、宣教の働きの中で、失敗し敗北感を味わったのかも知れません。他の兄弟たちといさかいがあったのかもしれない。イエス様のお考えや価値観が自分のそれと違っていてイエスご自身に失望したのかも知れません。何れにしても、自分の身勝手な理由からです。

逃げ戻って来たシモンは、「漁の仕事だったら、誰にも負けない。自分を取り戻せる。自信ある仕事だ。」と思っていたに違いありません。ところが、昨夜は夜通し働いてみても、一匹も魚が網にかかりません。「どうしたことか！」と、網の中も、シモンの心の中も、空っぽでした。

そのシモンのところに、イエスが彼を探し求め、近づいて来られたのが今朝の場面です。イエスは、シモンがご自分に従い、またやがて去って行ったことも、今、漁に戻り、茫然と網を洗っていたこともすべてご存知でした。同じ様に、イエスは私たちの全てのこと—失敗や悲しみ、悩み、苦しみ、挫折、罪さえも知った上で、尚も、私たちのところに近づいて来られる方です。

イエスは、シモンに言われました。「網を降ろし、漁をしなさい。」この時、舟の中はイエスとシモンの二人きりです。「さあ。漁をしなさい。」イエスは、シモンにとって一番簡単な朝飯前のようなことを言いました。しかし、彼には、突然の、しかも意外な言葉です。きっと、悩んだに違いありません。「陽の昇ったこんな時間に、漁をしたって無駄に決まっている。」という思いからです。漁のことも、ましてや経験もないはずの、ただの大工の息子の言葉で、シモンはイエス様の言葉を無視することもできました。けれども、そんな考えや思惑を、脇において「お言葉通り」に、網を湖に降ろしました。初めにイエスを「先生！」と呼んでいることから、シモンがイエスに敬意を示していることがわかります。

この「お言葉通り」という言葉は、イエスの母、マリアに天使が現れ、「あなたは身ごもって、男の子を産みます。名をイエスとつけなさい。」と告げられた時に、マリアが「お言葉通り、この身になりますように」と応えた言葉と同じです。「お言葉通りに・・・」これは、信仰の告白でもあり、神様への「純真な心」をあらわす言葉です。「純真さ」とは、まじりけのない、自分の気持ちに打算や駆け引きのないこと。」を意味しています。

シモンが「お言葉通り」にすると、おびたしい魚が入り、網は破れそうになりました。それを見て主の足元にひれ伏し、シモン・ペトロの口からはじめに出た言葉は、「主よ。」という叫びでした。少し前には、イエスを「先生！」と呼んでいたのが、今ここでは「主よ！」という言葉に、変わっていることにお気づきでしょうか。しかも、絶望的な叫び声です。「主よ。私から離れてください。私は罪深い者なのです。」数週間前には主イエスに従いながら、いま漁師の仕事に戻って来ている自分の姿が、心に映し出されたからに違いありません。シモンは自分の不従順さ、不忠実さを目の当たりにして自分を見失うほど、「恐れ」に震えています。「主よ！私から離れてください。私は罪深い者なのです。」その叫び声にイエスは、何と答えられたのでしょうか。「恐れることはない。」です。「シモン。あなたは自分で自分を責めなくても良い。わたしはあなたのすべてのことを知って、ここにあなたと共にいる。だから、恐れることはない。」何と慰め満ちた言葉でしょうか。

「恐れ」は、いつも人を萎縮させます。「お前は神さまに用いていただけない。成長できていない。信仰が弱いのは、不従順だからだ。」という思いが、私たちを縛ってしまうことがあります。私自身のクリスチャンの歩みの中で、いつも私に恐れを抱かせてきたのは、イエス様に対する従順さ、忠実さが十分ではないという思いからです。そんな時、私は自分が信仰不適格なのだと、自分を責めてしまいます。まさに、「主よ。私から離れてください。私は罪深い者なのです。」と叫ぶシモン・ペトロと同じです。

主イエスは、シモンに「恐れることはない。」と言って、それで終わりありませんでした。「今から後、あなたは人間をとる漁師になる。」と言われました。「今から後、」－このことばは、自分の罪に、恐れと挫折感に打ちひしがれているシモンの心に、赦しと希望の光が垣間見える言葉です。垣間見えるどころか、神様の赦しと希望、「新しい自分」の姿が輝いて見える言葉は、他にありません。「今から後！」「大切なのは、今からだよ！」

それは、私たちへのことばでもあります。「シモン・ペトロ。わたしはあなたがわたしから離れて行ってしまったことも知っている。あなたが挫折を味わったことも知っている。あなたが告白したように、あなたは自分が信仰不適格だと自分を責めた。あなたが悔い改めているように、あなたは自分が不忠実だと自分を責めた。あなたが赦しを求めているように、あなたは自分が不従順だと自分を責めた。ペトロ！よく聞くのだ。今までのことはもういいのだ！全ては終わったのだ！『今から後』、あなたは人間をとる漁師になる。」これが、シモンへのイエスのことばです。この時、シモンは以前の自分ではなく、今からの、これからの「新しい自分」に生きることが許されていることをハッキリ知るのでした。

イエス様は、なぜこの様にシモンを、また、私たちを赦すことがおできになるのでしょうか。それを知るためには、イエスの全生涯を見ることです。その生涯は、「従順」の生涯でした。フィリピの信徒への手紙2章8節には、

「キリストは、へりくだって、死に至るまで、

それも十字架の死に至るまで従順でした。」とあります。

イエスは、神様から遣わされてこの世に生まれ、ご自分を無にして、十字架で死ぬまで従順の道を歩かれました。それは、誰のためでしょうか。もちろん、父なる神さまに対して、神様のみこころのためでした。しかし、それだけではありません。

イエス・キリストは、私たちのためにも全き従順の生涯を生きてくださいました。罪のゆえに、

私たちが決して歩むことができなかつた従順の道を、主イエス・キリストが、私たちに代わって、歩まれたのです。本来私たちが歩むべきだつた従順の道、しかし歩むことができなかつたその従順の道を、キリストはペトロのために、私たちの代わりに、歩んでくださったのです。「主よ。私は罪深い者なのです。」と告白したシモンの不従順に、イエスはご自分の完全な従順を上書きされ、貼り付けられたのです。十字架の死に至るまでのご自分の完全な従順によって、イエスは私たちの不従順、不忠実をも帳消しにされました。ないものにされました。ないものにただけではなく、ご自分の「従順」を私たちの信仰の歩みに、新しく貼り付けてしまわれたのです。

コリントの手紙第二 5 章 17 節に 「キリストと結ばれる人はだれでも、  
新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。」

とある通りです。私たちに上書きされ、貼り付けられた「主イエスの従順」は、二度と私たちから、消え去ることはありません。剥がれ落ちることもありません。これが福音です。恵みです。

ですから、イエスはシモン・ペトロに「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる。」と、言われました。 実に確信に満ちた言葉です。数週間前にシモンが主から聞いた言葉は、「わたしはあなたを、人間をとる漁師にしよう。」でした。しかし、今、主の前にひれ伏しているペテロの耳に届いた言葉は、「あなたは、人間をとる漁師になる。」です。これは、「福音を伝える者となる。」「人を救いに導く者となる。」という意味として理解されています。しかし、それ以上に、私たちにとっては、「今から後も、あなたはキリスト者として生き続ける者になる。」という確信的な言葉だと、私は信じています。

私たちは、自分の力や頑張りで信仰の道を歩んでいるではありません。イエス・キリストというお方に背負われて歩んでいます。イエスの「従順に」背負われています。ですから、私たちは、今から後も、キリスト者として生きることができるのです。

皆さんは、「砂の上の足跡」という英語の詩をご存知でしょうか。ある宣教師が日本語学習の宿題で日本語に訳したものがあります。それをご紹介します。

ある晩、私は美しい夢を見たね。

はるか遠くに水平線の見える浜辺を、主と共に歩いていたよ。

浜辺の砂の上に 四つの足跡が残っていた。

二つは私のもの、もう二つは主のもの。

そこで私はその足跡を眺めながら、私は私が歩んだ道を再びさぐって見たんだ。

すると、所々に、私の人生の道に、  
ただ一人分の足跡だけしか 見えないところがあった。

その時は、私の人生の道で一番つらくて悲しみの時だったね。

そこで、私は不思議になって主に尋ねてみたよ。

「主よ！私があなたについて行く決心をしたその時、  
あなたは私いつも共に居て下さると、約束したのに、  
主よ、ご覧下さい。私が一番あなたを必要としたその時、  
その時には、一人の足跡だけしかありません。  
主よ、あなたは私から離れておられたんでしょうか。」

主が答えてくださった。

「わたしの大切な者よ。わたしはきみを愛していて、  
決して、一度も、君を離れたことはない。  
きみの試練の時にも、きみの苦難の時にも、  
あなたが泣いていた時にも。・・・

あなたが見た その一人の足跡は、  
それは 君の足跡じゃなくてわたしの足跡だよ。  
その時、君がつかれて自分で歩けなかったその時、  
わたしがあなたを背負って歩いたんだよ。」

私たちは、主イエスに、主の「従順」に背負われて信仰の道を歩んでいます。  
ですから、今から後も、「主を愛する者」、キリスト者、クリスチャンとして生きてまいりま  
しょう。

「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる。」